

伊澤蘭軒 伊沢蘭軒

いざわ・らんけん いざわ・らんけん

福山藩医、儒官

経歴

生: 安永6年(1777年)11月11日、江戸・本郷真砂町生まれ

没: 文政12年(1829年)3月18日、享年53歳、江戸・長谷寺(ちょうこくじ)に葬る

幼時	—	榊原弥平兵衛忠寛(ただひろ)(后兮)に師事
天明9年(1789年)	12歳	泉豊洲に経義を問う
—	—	豊洲塾において目黒道琢、武田叔安(長春院)に医学を学ぶ
寛政6年(1794年)	17歳	阿部家へ出仕、正倫の侍医となる
文化元年(1804年)	27歳	江戸において菅茶山に出会う
文化3年(1806年)～ 文化4年(1807年)	29～ 30歳	長崎に赴き、清国医師の程赤城・胡兆新らと交わる
文化3年(1806年)6月17日	29歳	長崎への途上、神辺の菅茶山を訪ねる
文化3年(1806年)	29歳	広島において頼春水、頼山陽に会う
文化12年(1815年)	38歳	奥医より表医に移る
文政2年(1819年)	42歳	儒官(兼藩医)

生い立ち・学業と業績

生い立ち

名は信恬(のぶさだ)。通称が辞安。字は君悌のち愼甫。号は蘭軒・蘭齋・ケン齋(ケンは草冠に姦)・都梁・笑仙・笑僊・藐姑射山人(邈姑射山人)など。堂号は酌源堂、三養堂。書室を芳樹書院とよんだ。

家は、代々の福山藩士。

父は伊澤長安(はじめは玄安)信階[号:昇軒]、その長子として生まれる。

伊澤家の初代は伊澤吉兵衛正重で、三河出身の旗本であった。

学業

泉豊洲に経義を問い、また豊洲塾において目黒道琢・武田長春院叔安に医学を学んだ。文化元年(1804年)に長崎奉行の榊原主計頭に従って長崎に赴き、清国人医師の程赤城・胡兆新らと交わった。

長崎への途上には神辺の黄葉夕陽村舎を訪れ、菅茶山に再会している。

また本草学は、太田大洲(澄元)、赤荻由儀を師とした。医学上の考証の学に長け、有名となった。

業績

藩主・阿部正精の信任を得て藩医となり、さらには儒官を兼ねた。

桜の樹を愛し、自宅の庭へ芳野山の桜樹を移植して、ゆえに居所を芳樹書院と名付けたという。

菅茶山、頼春水、頼杏坪、真野竹亭、鈴木宜山、太田南畝、亀田鵬斎、狩谷掖齋、横山辰弥、木村定良、植村士明などの文化人との交流がある。

門下生に門下五哲といわれた森枳園(立之)、渋江抽齋、岡西玄亭、清川玄道、山田広業がいる。

晩年は、足に疾患があり癒えず、膝行して阿部正精公側に侍し、公はこれを厚く信任したという。

文政12年(1829年)3月18日、53歳で病没した。

江戸は長谷寺(ちょうこくじ)《現港区西麻布》に眠る。

法名は芳櫻軒辞安信恬居士。

森鷗外の著書『伊澤蘭軒』によっても知られる。

自らの肖像画を、武具をつけたスタイルで福山の画人・村片相覧(むらかた・おうみ)に画かせている。

伊澤家

蘭軒は、妻・益(ます)との間に三男五女をもうけた。

蘭軒没後の伊澤家はその第一子の榛軒がついだ。

榛軒には子がなく養子子の棠軒が家督を相続した。

蘭軒の第二子・伊澤柏軒も奥医師で、阿部正弘を看取った。

出典1:『藝備醫志(芸備医志)』、26頁、広島県医師会編刊、昭和48年11月11日

出典2:『穆翁傘寿録「往時縹渺」』、45頁、岩崎博著、鶴庵文庫刊、2007年12月1日

出典3:『芸備両国医師群像』、22頁、「井沢蘭軒」、阪田泰正著、安芸津記念病院郷土史料室刊、昭和58年1月1日

出典4:『福山の今昔』、161頁、濱本鶴賓著、立石岩三郎刊、大正6年4月26日

出典5:『福山市史 近世編』、848頁、福山市史編纂会編刊、昭和43年3月30日

出典6:『広島縣醫人傳(第1集)』、10頁、「伊澤蘭軒」、江川義雄編刊、昭和61年4月19日

出典7:『近世後期の福山藩の学問と文芸』、73頁、「伊澤蘭軒」、福山市立福山城博物館編刊、平成8年4月6日

出典8:『福山藩の文人誌(再刊)』、198頁、「伊澤蘭軒」、濱本鶴賓、葦陽文化研究会編刊、1988年7月22日

2005年3月23日更新:出典●2006年2月24日更新:経歴・本文●2006年6月15日更新:タイトル●2007年12月21日更新:経歴・本文●2007年12月26日更新:本文●2009年10月1日更新:本文・著書・出典●2009年10月20日更新:経歴・本文・著書→探しています・出典●2012年2月2日更新:経歴・本文・出典●2014年5月9日更新:本文●2015年10月20日更新:レイアウト・経歴・本文・探しています・出典●